

〈自由投稿論文〉

キューバにおける Yoruba 系宗教の アフリカ回帰主義的動向とその多様性

井上 大介

要約

本稿は、キューバにおける Yoruba 系宗教、レグラ・デ・オチャーフア信仰の組織化の動向について、特にそこでの多様性について論じるものである。

レグラ・デ・オチャーフア信仰は、アフリカ・ナイジェリアおよびその周辺地域に発展した Yoruba 語系文化を起源とする宗教が、大西洋奴隷貿易を契機にキューバにもたらされ、その後カトリックや心霊主義と融合しながら発展した民衆的宗教習俗である。

しかしグローバル化の影響のもと、キューバ国内の政治的状況の変化によって、近年では同信仰の組織化が顕著となり、これまでの宗教実践の性質が変容しつつある。

本稿では、歴史的に隠蔽されてきたアフロ・キューバ系宗教の実践が、政府の政治的、経済的、文化的方向性の変化によって促された組織化の流れの中で、従来の実践コミュニティ的特徴を弱化させつつあると共に、キューバ的伝統を重視するグループとアフリカ回帰主義的グループが台頭し、特に後者において様々な立場の主張が顕在化しており、それが民衆宗教の特徴を理解する上で重要な題材を提示しているという点について論を展開する。

キーワード Yoruba 系宗教, レグラ・デ・オチャーフア, キューバ, 民衆文化, グローバリゼーション, 実践コミュニティ

I 序論

1 問題の所在

ソ連邦が崩壊した 1991 年以降、キューバ（資料 1・2）では、革命政権によってマルクス主義とキリスト教の同盟が提案され、1991 年の第 4 回キューバ共産党大会においては、宗教実践者の共産党入党が承認されることとなった。結果、キューバが無神論国家から世俗国家に移行するに至る〔工藤：1998：512, 1999：18；Argyriadis 2005：90〕。

グローバル化に後押しされたこのような社会変化は、キューバ国内における宗教事情をも一変させることとなった。これまで秘密裡の活動を余儀なくされてきたアフロ・キューバ系宗教の動向に関して言えば、それらの活動や実践者が、社会空間の中でより顕在化することとなったのである〔工藤 1999：26 他〕。

特に、ヨルバ系宗教であるレグラ・デ・オチャ、イファ信仰（後述する）に関しては、従来、サンテロやサンテラ、ババラオ（後述する）と呼ばれる宗教職能者を中心に、個人的、家族的な実践が重視されてきた宗教習俗が、近年では組織化する傾向を強めるとともに、教義や儀礼がより制度化される流れが進んでいる⁽¹⁾。

本稿では、これまで執筆してきたヨルバ系宗教の組織化とそこにみられるヨルバ文化協会を筆頭とする国民文化的潮流とアフリカ回帰主義的動向の対立〔井上 2015〕というテーマを念頭に、特にアフリカ回帰主義的グループにおける多様性について論を展開したい。

またそれらの信仰実践者におけるグローバル、ナショナルな社会変化とローカルな文化的諸動向との結び付きを分析する。具体的な研究目的としては、宗教的正統性をめぐるヘゲモニー的实践（後述する）の諸特徴がいかなるものかという点について、実践コミュニティ論に根差した民衆宗教（後述する）という枠組から考察するという点にある。

一方、クリフォード・ギアツは文化を「象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している」と定義 [ギアツ 1987 : 148] した上で宗教を「象徴の体系であり、人間の中に広くゆきわたった、永続する情調と動機づけを打ち立てる。それは、一般的な存在の秩序の概念を形成し、そしてこれらの概念を事実性の層をもっておおい、そのために情調と動機付けが独特な形で現実的であるようにみえる」ものであると定義している [ギアツ 1987 : 150-151]。

これらの定義は多くの宗教研究者によって援用されてきたが、筆者の見解によれば、権力関係における文化の正統性をめぐる構築主義的な視点が欠落している。デュルケムは同著において、世論の影響について言及する中で、学術研究が必ずしも価値中立的ではありえない点、聖性というものが本質的な事象ではないという事実を指摘している。一方、ギアツの定義では「事実性の層をもっておおい…」との記述によって、宗教的パースペクティブにおける正統性の立ち現われ方に関する視点が考慮されてはいる。しかし、双方の宗教の定義では、文化および宗教が権力や権威機構との正統性をめぐる関係性の中で流動的に変化するという視点は等閑視されているのである。

他方、民衆文化研究においては、近年、戦術や流用—従属階級が支配階級の提示する文化的要素を一方的に受容するのではなく、独自の解釈、用い方によってそれらを変容させ、既存の秩序の活性化を図ること—といった概念 [ド・セルトー 1987 : 23-36 ; 小田 1996 : 848 他] が重視されている。

またアントニオ・グラムシのヘゲモニー論も従属階級の文化研究においては、重要な切り口として注目されて久しい。グラムシによれば、ヘゲモニーとは「説得によって同意を獲得する指導性あるいは支配権」のことである。文化研究との関連では、ある特定の文化的要素が社会的正統性を獲得するには、政治的、法的、経済的、学術的、教育的など多様な権威機構による承認が必要となるとともに、そのような正統性が歴史的に定着するには、それをめぐる人々と権威機構との絶え間ない折衝や合意が不可欠となる、といった主張が展開されており、文化と権力の関係が重要な観点として提示されてい

るのである [Gramsci 1975 : 230-231, 井上 2013 : 40]。

一方、人類学研究においては、田辺繁治が、ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガーの論 [レイヴ／ウェンガー 1993] をもとに自ら発展させてきた実践コミュニティ論 [田辺 2002, 2003, 2010, 2012 他] が、ポストモダン人類学によって批判されてきた本質主義と結びついた人類学的イデオロギー [クリフォード／マーカス 1996 : 3] を乗り越える新たな民族誌的研究視座として注目されている。

田辺の概念化する実践コミュニティ論は、人々が主体的に集いあう、自らの存在や生命への関心によって形成された構築主義的なコミュニティへの参加におけるアイデンティティ形成プロセスに注目する。田辺はレイヴ、ウェンガーが提示する論とは異なり、情動や非言語的コミュニケーション、外部との権力関係を重視しつつ、同概念によって「社会的従属階級に属するような人々の主体性が、いかに確立しうるのか、またそれがどのような社会変革の可能性としての活力に転換しうるのか」という点を新しいコミュニティ概念の構築とともに模索する。同論の特徴はグループへの参加、協働、折衝といった相互行為を通じ、正統的周辺参加という学びにより実践知を得ながら、そこに参加する人々の間で、アイデンティティ化がもたらされるとともに、それが外部の権力との関係性の中で流動的に変化するという点にある。また同コミュニティの境界が様々な境界と隣接し、重複しているといった観点も特筆に値する⁽²⁾。

本論では、口頭伝承によって師匠から弟子に継承されてきた宗教実践および知の体系が組織化の動向により形式化し、権力に取り込まれたり、分断させられたりする可能性を念頭に論を展開するため、上記した田辺の実践コミュニティ研究で提示された諸論に負うところ大であることを断っておきたい。

以上の知見に依拠しつつ、本稿では民衆宗教を便宜上、以下の通り定義しておきたい。

すなわち、民衆宗教とは「実践コミュニティを母体とし、社会における支配者層とのヘゲモニー的状况による闘争や折衝の中で、様々な戦術を駆使しながら、社会の諸機構を通じて、流動的に構築、再解釈、再生産されてきた

従属階級各集団間のアイデンティティと連動する共通の聖性、世界観、道徳的規範をイメージさせうる、物質、観念、事象と関連した信念および諸儀礼に基づく象徴の体系である。また基本的には明確な教義、儀礼、組織が広範かつ統一的に整備される前段階の宗教習俗である。」⁽³⁾

(2) グローバリゼーションと民衆宗教

グローバリゼーションについては、これまで様々な研究が蓄積されてきた。

アンソニー・ギデンズはグローバリゼーションを、遠く隔たった地域を相互に結び付けていく世界規模の社会関係が強まっていくことであるとする [ギデンズ 1993: 85]。

ローランド・ロバートソンは、グローバルな世界の均一化が推進される一方で、ローカルな諸相が顕在化、再活性化する現象、普遍性の個別主義化、個別性の普遍主義化を推進する現象として定義する [ロバートソン 1997: 136]。

前者は、近代化とともに進展してきた現象とし、後者は近代以前から存在する現象として、特に宗教との関連で考察を展開している。

しかしそれらを含む多くの議論において、グローバリゼーションが、ナショナルやローカルな次元とどのように連動するのかといった点についてあまり言及がなされていない。

一方、サスキア・サッセンは、グローバリゼーションによって国民国家の重要性が衰退するものではないという観点から、同現象による国家の変容という側面に注目しつつ、グローバリゼーションとリージョナル、ナショナル、ローカルな諸次元の関係性について考察する必要を強調する [サッセン 2011: 17-37]。

またアルジュン・アパデュライも、人類学的関心に基づき、グローバル化によってローカリティが、特にナショナルな諸相との関係でどのような位置を示しうるのかという観点を重視している [アパデュライ 2004: 317]。

本論では以上より、グローバリゼーションを「近代以降顕著となり、90年代以降より急激に進行してきた国境を越えるヒト、カネ、もの、情報の交流によって推進される社会関係の強化、および個性の普遍主義化と普遍性

の個別主義化がグローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな諸次元で顕在化する現象」と定義して論を進めたい。

3 先行研究、研究意義、仮説、研究方法、研究範囲

キューバにおける Yoruba 系宗教の研究は、大杉 [大杉 2004 : 440-441] が整理している通り、1900 年代初頭にキューバの民俗学者フェルナンド・オルティスによって先鞭が付けられ [Ortiz 1921, 1984, 2007 他]、以降①民族誌的研究 [Cabrera 2009 他] ②ナショナリズム論に依拠した研究 [Moore 1920-1940 他] ③政治思想との関係性についての研究 [Fernández 1992 他] という分野が確立した。

他方、日本国内の研究動向に関して言えば、②の内容に沿った研究 [工藤 1998 : 494-516, 1999 : 12-27]、及び②と③の折衷をめざした研究 [大杉 2004 : 437-459] が展開されている。

しかしそれらの研究では、本稿で留意するグローバル化やジェンダー、民衆文化論的枠組での十分な分析はなされていない。さらに、キューバにおける組織化や組織間の対立などに関する研究は存在しておらず、それらに注目することが本稿の研究意義となる。

本稿の仮説は、民衆宗教がナショナルな次元において、国家や社会の権威的影響によって制度化するとともに、分断させられ、支配的影響力に取り込まれていくというものである。また勢力を弱体化させられる集団は、自らの正統性を求めヘゲモニー的抵抗を实践するが、そのことによって、さらに派閥が生じ分断が拡大していく、といったものである。また民衆宗教実践者の言説やアイデンティティが、実践コミュニティの状況の中で、正統性を巡って揺れ動くとともに、信者を含む各立場の主張において、グローバル、ナショナル、ローカルな諸言説が顕在化し、そのような言説が同信仰の「実体」を構築するというものである。

なお本稿の調査データは、2014 年 8 月、2015 年 8 月、2017 年 3 月、2018 年 3 月に実施したそれぞれ約 1 か月間のフィールドワークに依拠している。ハバナ市内（資料 2）⁽⁴⁾にある 12 か所の活動拠点（Yoruba 文化協会、セントロ・ハバナ地区のサンテリーア拠点 3 か所、IV 章で紹介するハバナ市内の

エグベ 8 か所)で行ったフィールド調査の記録に依拠する。調査は質的なものであり、約 70 人の宗教実践者へのインタビューや活動に関する参与観察で構成されている。記載する個人名、団体名については本人の了承を得ている。なお本稿では、キューバにおける Yoruba 系以外の宗教実践は対象に含まない。

II Yoruba 系宗教の概要⁽⁶⁾

Yoruba 系宗教の概要については、別稿 [井上 2015] で既に紹介しているが、本論の主題でもあるため、一部内容が重複するものの、ここでもその特徴を整理しておきたい。

現在のキューバ社会で実践されている Afro・Yoruba 系宗教、特に Yoruba 系とされる Legba・De・Ochô および Ifá 信仰として知られる宗教習俗は、アフリカ・ナイジェリアの Yoruba 地域に起源をもつ宗教伝統が、18 世紀に本格化した大西洋奴隷貿易のために「新大陸」に連れてこられた黒人奴隷によってキューバに伝わったものである。しかしキューバにおいては、その後、カトリックおよびフランスのアラン・カルデックによって発展したカルデカン・スピリティズムと呼ばれる心靈主義⁽⁶⁾と結びつき、混交宗教として変容していくこととなる。

Yoruba 地域は、ナイジェリア南西部を中心に広がる Yoruba 語族が集住する一帯を指す。18 世紀以降は、ヨーロッパによる奴隷貿易の中心地となり、そこから多くの黒人たちがカリブ海諸島やブラジル等に連行されていった。キューバに移送された黒人労働者たちは、当時、出身地や言語グループにそってカトリックの下部組織であるカビルドと呼ばれる共同体に振り分けられ、過酷な労働を強いられるとともに、カトリックへの改宗を余儀なくされていく。

しかしこのカビルドは、黒人たちのアフリカ起源の宗教を含む音楽や舞踊といった文化的実践を維持するための空間を提供することとなった。そのような状況において、黒人たちは、カトリックへの改宗を表面的には受け入れつつも、自らの宗教的要素をカトリックの諸要素と結びつけながら、その伝

統を保持していったのである [Ortiz 1921 : 14-15]。

キューバで発展した Yoruba 系宗教は、大きくわけて レグラ・デ・オチャ および イファ と呼ばれる二つの信仰形態で構成されている。レグラ・デ・オチャ は、オロフィあるいは オロドゥマレ と呼ばれる至高神⁽⁷⁾を中心に種々の オリチャ (複数形では オリチャス)⁽⁸⁾ と呼ばれる神々を崇拝するとともに、特定の個人と師弟関係を結びながら サンテロ (男性聖職者で ババラオチャ と呼ばれる)、あるいは サンテラ (女性聖職者で イヤロチャ と呼ばれる) のもと、弟子 (アイハード) となり、入信儀礼を通じて各人固有の守護神を授かり、ディロゲン と呼ばれる子安貝の殻による託宣をもとに個人の行動規範を遵守していくといった宗教実践を展開する⁽⁹⁾。

一方、イファ信仰は、レグラ・デ・オチャ で提示される オリチャス の一つで オルンミラ (最高位の オリチャ とされる) と呼ばれる預言者を司る オリチャ の言葉、イファ を託宣によって授かる儀礼 (イファ託宣 と呼ばれる) をベースとする宗教習俗であり、Yoruba 系宗教では最高位の聖職者とされる ババラオ を中心とした信仰体系となっている。

イファ託宣は イキン (ヤシの種)、エクエレ (イキンをつないだチェーン)、タブラ・デ・イファ (イファの板) など ババラオ にのみ許された祭具を用いて実践される占いである。なお、一般的に女性は ババラオ にはなれないとされているが、後述するようにその解釈をめぐる対立が顕在化しつつある⁽¹⁰⁾。

レグラ・デ・オチャ と イファ信仰 の関係であるが、ババラオ が サンテロ (ラ) が実践できない種々の秘儀に従事するため、イファ信仰が レグラ・デ・オチャ の上位区分であるとみなす者、双方を別の宗教体系であると理解する者、イファ信仰が特定の オリチャ のみを重視することから、レグラ・デ・オチャ の下位区分であると考える者など様々な解釈が存在する。しかしこのような解釈の多様性こそが、キューバにおける Yoruba 系宗教の現状であると理解すべきであろう。本稿ではこれらの宗教習俗が、Yoruba 系宗教の二つの構成要素であるとともに、ババラオ がそこでの最高権威であるとの理解のもと論を進めたい。

いずれにしても、Yoruba 系宗教においては、前述の通り オロドゥマレ を至

高神と定めているが、それ自体は信仰の対象とはされていない。信仰の対象となるのは、至高神と人々を仲介するとされる特定のオリチャあるいは複数のオリチャスとなる。

以上がヨルバ系宗教の概要であるが、一般的な信者の特徴としては、日々実践されるオリチャスへの崇拝など基本的な諸儀礼は、自身の家に設置された祭壇の前で行われる。しかし宗教的カレンダーにしたがって、先祖崇拝や託宣・動物供儀、オリシャの誕生祭、各種入信のためのイニシエーション等の儀礼は、サンテロ（ラ）やババラオの家において、家族的な人間関係のもと執り行われる。

しかし近年では、書物が普及し、師匠と弟子の関係が以前よりも曖昧になるといった傾向も顕在化しつつある。そのような中、師匠の教えから逸脱したり、自身の都合や利害関係によって師匠を変更したりするような信者が増加している。また師匠であるババラオに関しても、十分な知識を備えていない者、金銭目的で宗教を利用する者、またインターネット情報にそって儀礼を執り行う者などが増えている。さらには近代的文脈において、儀礼が簡略化するといった傾向も信者からのインタビューで明らかになっているのである。このような特徴は、信者間における知の継承、アイデンティティ化を育む実践コミュニティ的特徴の弱体化として理解できるのである。

Ⅲ ヨルバ系宗教における組織化の流れ

現在、キューバにおけるヨルバ系宗教は、別稿〔井上 2015〕で述べたヨルバ文化協会を筆頭に組織化の流れが進展している。同協会は、キューバ政府によって宗教法人格を与えられた唯一のヨルバ系宗教団体である。そこではキューバ国民文化、具体的にはアフロ・キューバ文化の中でも特に音楽や舞踊など芸術的側面を強調した文化・芸術活動を中心に、社会貢献を推進する団体であり、同組織をもとに、キューバにおけるヨルバ系宗教の教義・儀礼的多様性を統合する流れが進んでいる。同協会の特徴としては、ヨルバ系宗教の「本質」がキューバにのみ現存するものであるという点、またアフリカで認められている女性の最高聖職者イヤニファを認めてこなかった点

(2018 年の調査ではその傾向は弱まっている) など、よりキューバ的アイデンティティを強調する点にある。

しかし、その流れに抵抗するかのごとく、アフリカ回帰主義的傾向を持つ実践者たちの活動も同時に活発化する傾向にある。

彼らは、Yoruba 系宗教の起源とされているナイジェリアの宗教文化をより強く意識し、Yoruba 語でエグベと呼ばれるフラテルニダ (英語ではフラテルニティ) を組織し、活動を展開している。アフリカ回帰主義を掲げてグループ化された諸集団のいくつかは、ナイジェリアの Concilio Internacional de Ifá (イファ国際評議会) という組織に加盟しているが、そのほかの集団は、より上位の組織によって統合されることをよしとせず、独立した集団としてその活動を展開してきた。

そこでの特徴は、植民地時代以降、キューバで発展した Yoruba 系宗教の伝統にそのまま依拠するのではなく、アフリカから「新しい」宗教的要素を輸入することで、彼 (彼女) らが組織する宗教実践の正統性、独自性および宗教的権威を標榜する傾向にあるという点である。それらの宗教要素の中には、教義、本尊、薬草、言語表現、衣服、楽器、音楽、舞踊、家族形態などが含まれる。そのような宗教要素は、キューバで開催される宗教間会議などにナイジェリアから参加する実践者を通じて、あるいはキューバを頻繁に訪れるキューバ国外に在住する実践者やアフリカで入信したキューバ人などによって受容されている。指導者の多くは、同宗教に関する深い知見を有するものというよりは、アフリカの権威をもとに、多くの弟子を有し、その弟子たちと組織化を形成し、教科書やセミナーなど学校教育的環境を導入し信者の育成に従事する傾向をもつ。またインターネットによる情報の受容なども顕著となっている。なおこれらの団体ではアバクアやパロとよばれるその他のアフリカ諸地域から移植されたアフリカ系宗教の実践は行わない傾向にある。

IV アフリカ回帰主義の多様性

以下では、上記したアフリカ回帰主義者の代表的存在について紹介し、その特徴を分析したい。アフリカ回帰主義的グループの代表的存在であるとき

れているビクトル・バタンコートのグループについては別稿で紹介する予定であるため、ここではその詳細については割愛するが、本論での文脈上、その中心的特点については記述しておきたい。

バタンコートは、1953年にヨルバ系宗教実践者の両親のもとハバナ市に生まれる。1963年にマノ・デ・オルーラ、1981年にサントを授かり、1985年にババラオとなる。

バタンコートの展開する諸活動では、教義や儀礼において、ナイジェリアの伝統が強く意識されているということであり、それらの中で特に重視されていた実践が女性の最高聖職者イヤニファのための儀礼であった。同儀礼をキューバの伝統に根差し否定するヨルバ文化協会に対しては「クリオージョ的宗教実践の限界を示している。アフリカでは同伝統は承認されているので、我々はキューバでも同実践を展開していきたい」と、ヨルバ文化協会との立ち位置の違いを強調していた。バタンコートは国外の講演会などにも頻繁に出向くとともに、多数の出版物を刊行しており、また、自らアフリカの伝統に根差し、一夫多妻制を容認し、自ら二人の妻を有しているとともに、その二人の妻に対し、イヤニファの儀礼を実施するなど、キューバ国内のヨルバ系宗教に大きな影響を与えている。

なお彼とのインタビュー（2018年3月）で特筆すべきは、「私はアメリカ、メキシコ、アルゼンチンなどに頻繁に出かけていますが、ナイジェリアには行ったことがありません。行くつもりもありません。キューバに来るナイジェリアのイファ聖職者は、キューバの伝統を軽視しているからです。おそらく白人や混血に対し、人種主義的経緯から信頼を寄せていないのかもしれませんが。いずれにしても、ナイジェリアの多くの聖職者はキューバのヨルバ系宗教実践者を軽視していると共に、経済的観点からそのような実践者にナイジェリアの権威を授け、自らの正統性を宣揚しているように思います」とのナイジェリアの伝統に対する見解であった。アフリカ回帰主義を標榜しつつも、実際にはそことの距離を保つ姿勢が垣間見られる興味深いコメントであった。

次に紹介するのはアンヘル・ウィリアム・ヴィエラ・ブラヴォである。ウィリアムの経歴や組織の概要についても別稿で紹介するためその概要は

割愛するものの、特筆すべきは、彼が2013年12月にナイジェリアを訪問し、アウォレニという人物の系統に属するナイジェリア組織からアラバ・デ・ラ・ハバナ（ハバナにおける最高位のババラオとの意）との称号（王冠）を授与されている。またその際、ナイジェリアからイファの太鼓（イルウ・イファ）をキューバに持ち込み新たな伝統を普及させつつある点である。

彼のエグベでの諸活動も、ベタンコート同様、イヤニファの存在などナイジェリアの伝統が重視されており、誦句や祭具はキューバで使用されないものが多く用いられていた。

彼とのインタビューでは、以下のようなコメントが確認できた。

「ヨルバ文化協会はアフリカ回帰主義的ババラオを排除しています。すべての実践者が協力することが望ましいにもかかわらずです。私が、ナイジェリアで王冠を授かったことに對し快く思っていないようです。」「アフリカへの回帰については、自身がアフリカ系キューバ人であり、自分のルーツを探るといった意味も存在しています。しかし教義の深化ということがより重要だと思います。アフリカの教えは非常に奥が深いです。」と述べた。また、「現在、アフリカ回帰主義的グループの統合が目指されていますが、その中心として行動しているビクトル・ベタンコートなどは、私がナイジェリアで王冠を授かったことを快く思わず、そのような統合において私を排除しようとしているように思います。ビクトル・ベタンコートに関して言えば、彼は伝統主義者ではなく、クリオージョと伝統主義の間を往復し、うまく立ち回っているように思います。彼は非常に政治的な人物です。」

ここでは、アフリカへの回帰が自らの起源の探究とも連動している点が語られているが、教義的関心がより重要であるとの見解が示されている。彼は、自らのアイデンティティについて「我々はヨルバ協会などをクリオージョ派と呼んでいますが、実際、キューバでの実践者は全て、アフリカ回帰主義者も含めクリオージョ派だと思います。この事実は公の場では表明しませんが、周囲のアフリカ回帰主義者もそう感じています。我々はキューバ人であり、キューバでこの信仰にめぐりあっていますから」との見解を示したが、このようなコメントは、アフリカへの訪問を繰り返し、そこへの回帰を強く意識するウィリアムの中に、自らをキューバ的实践者として規定するもう一つの

アイデンティティが交錯していることを表している。

次にエグベ・トゥントゥン（名称の意は「聖なる新天地」）と呼ばれる1997年にハバナに設立された組織について見ていきたい。代表はフランク・カブレラ・スアレス（オカンビ）という人物である。同組織が掲げる目的は「ナイジェリア的伝統に依拠したイファを実践すること」とされている。現在は、約300人のキューバ国内外のパバラオが加入している。上記した代表と共に、同組織の3人のパバラオが2013年にナイジェリアを訪問し、現地の宗教文化に関する諸要素を受容し、それらをキューバにおいて展開している。代表のフランク・カブレラはキューバにおけるヨルバ系宗教の発展に先駆的な功績を残してきた人物である。フランク・カブレラは1954年にハバナで生まれ、1961年にオリシャを授かり、1962年にパバラオとなった。その後は、キューバの代表的な指導者、ミゲル・ファブレス・パドロンやナイジェリアのタイウォ・アビンンボラなどに師事しながら、ナイジェリアやアメリカから取り寄せた文献をもとに、ナイジェリアに現存するヨルバ宗教の教義・実践について地道な研鑽を続けてきた。フランク・カブレラは、第10回世界ヨルバ宗教会議にも代表で参加し、彼の存在は、キューバ内外の実践者に知られるところとなっている。

以下は、フランク・カブレラへのインタビュー内容である。

「他の団体のことを非難するつもりはないが、パバラオとして活動するために、最も重要なことは、研鑽するということである。宗教儀礼のみならず、医学、健康、託宣などあらゆる正統な知識を有している必要がある。35年は修行が必要だと思っている。現在、イファ宗教がキューバで熱を帯びているが、真剣に研鑽するという態度が薄れているように思う。アフリカの伝統をアフリカの宗教専門家からもっと真摯に学ぶべきである。キューバに伝わったものは、奴隷によって断片的に伝えられたものであるということを自覚すべきである。キューバのイファ信仰は、キューバにおけるアフリカ宗教である、との意識が重要だ。アフロ・キューバ宗教という概念自体が的の外れである。でなければ、我々はみなアフロ・キューバ人ということになるだろう。ヨルバ文化協会は一定の役割を担っており、制度の整備や政府との交渉などで、イファ宗教の発展に貢献しているとは思いますが、彼らの役割はそこ

までだ。よりこの宗教を深めるためには、彼らの存在だけでは十分ではない。やはりアフリカに知恵と力を借りなければならないだろう。また指導的立場にある人間は、中途半端な知識で権威を主張したりするのではなく、もっと研鑽し、若者を育て、イファ宗教の発展のために尽力してもらいたい。若者たちは最も、我々の世代の業績を学ぶべきである。私は教育学を学んだ経緯から、現代のイファ信仰にとって最も重要な点は、キューバ社会全体における初等教育の質的向上だと考えている。アフリカの伝統を重視するといっても、一夫多妻制などは、キューバ社会の法的規範に反しており同意できない。イファは、水のようなものであり、時代によって、社会によってその形が変容していくが、あくまでも社会的規範に沿って、解釈されていくべきである。信者間の分断に関してもイファ的思想からみれば間違った動向であると考えている。」

彼と懇談した際には、彼の有するイファ宗教に関する膨大な知識量に驚嘆した。様々な概念や諺句に加え、歴史的人物、託宣、薬草や伝統医療、儀礼などの情報が、まるで教科書を読んでいるかのごとく滔々と披瀝され、彼の学びの深さをうかがい知ることができた。テキストや場合によってはスマートフォンなどを見ながら儀礼を執行する近年のババラオたちとは一線を画した存在であった。そのため、彼は自分の存在と周囲のババラオ達の研鑽の態度に大きなギャップを感じているようである。

コメントでは、アフリカの伝統の深さが強調されており、それらを真摯に学ぶ必要性が強調されていた。そして同時にキューバ社会の法的規範の遵守、他者との共存、社会貢献、教育の重要性などが示唆されていた。

また今の若い世代のババラオたちが、彼の積み重ねてきた歴史、業績を研鑽せず、表面的な実践に終始している点に危機感を表明していた。

次に紹介するのは、2004年にハバナに設立されたエグベ・イファ・オシェ・アブレ・ラ（名称の意は「恩恵を受けるもの」）である。代表はファン・フェリペ・メデロス・エルナンデス（イファディベ）という人物である。同組織の目的は「キューバにおけるイファに関する知識を深化すること」とされている。彼の自宅を起点として存在する同組織には、現在（2014年8月現在）15人のババラオと、2012年、2014年に入信した二人のキュー

バ在住のイヤニファが加入している。活動については、ナイジェリア出身の宗教実践者との交流を維持しながら、週2回の教義や儀礼に関するセミナー等を実施している。

ファン・フェリペは1995年にハバナで生まれ、サンテラであった母の影響で、1963年から1964年にマノ・デ・オルーラおよびサントを授けられた。学生時代は、ハバナのプーシキン大学外国語学部で勉強に励み、ロシア語、英語、フランス語などを習得した。卒業後は語学の教員、翻訳者として働きながら、諸宗教の経典、特に仏教や儒教、ヒンドゥー教の経典などを読破した。特に仏教の教義を研鑽する中で、自身の実践するイファ信仰における哲学がそれらと多くの共通性を有することを理解する。このような経緯を経て、1981年にイファを授かる決意をし、その後、ババラオとして活動を展開することとなる。しかし、教義の研鑽を深めるほど、よりアフリカ起源の教えに傾倒するようになり、ババラオ・クリオージョとしてキューバに現存する伝統に依拠した実践を展開することよりも、ババラオ・トラディショナル리스트としてよりアフリカの伝統に近接することに関心が移行していった。そのような彼の立場や変化を近隣の信者たちは必ずしも理解しておらず、周囲との隔たりは大きくなっているとのことである。

彼とのインタビュー内容は以下のとおりである。

「私はヨルバ文化協会には所属していません。協会はアフロ・キューバ宗教の実践団体であり、イヤニファに反対しているため、私はその存在を認めていません。最近は少し変化しているかもしれませんが。私のエグベでは、週2回、教義や儀礼の勉強会をしています。格言や哲学をマイアミ経由でナイジェリアから取り寄せた英語の文献などで研鑽しています。イファ信仰は、古い文化であり、生きるため、他人を助けるため、社会貢献をするため、自然との調和を図るために重要な思想を我々に提供しています。我々の組織は、パロやアバクアなどの実践を否定しています。あくまでもヨルバのイファが中心です。キリスト教など西洋の宗教は自然との分離をもたらし、物質的文化を推進しています。仏教などは自然との調和を教える宗教だと理解していますが、ヨルバの宗教はより自然や環境との調和を強調した思想です。ピクトル・ベタンコートは友人であり、よく研鑽しているババラオであると敬意

をはらっています。またフランク・カブレラなども尊敬しています。しかし最近の傾向、特に、ナイジェリアで称号を得たことで自らの権威や正統性を主張するような若いババラオの台頭などは子供じみています。彼らは年配者からもっと学ぶべきだと考えます。」

彼へのインタビューでは、言語的関心から自身の宗教に関する理解を深めていった過程が理解できた。また実践を深める過程で、キューバ的傾向から遊離しアフリカへの回帰的傾向が強まったこと、宗教の組織化や、Yoruba 文化協会の存在、クリオージョ的实践には距離をとっていること等が理解できた。また、フランク・カブレラ同様、彼の自宅においても、データ化された多くの記録文書や映像資料、彼によって記された講演原稿や論文類がパソコン内に保存されており、現代社会におけるババラオに必要とされる情報の収集、管理、保存に関する能力の一端が看取できた。

続いて言及するのは、エグベ・イファ・ソティト（名称の意は「真実のイファ」）と呼ばれる 2009 年に設立された組織である。代表は、ホルヘ・ロジェ・キンターナ（ティファセ・アライク）という人物である。同組織の目的は「ナイジェリア的伝統を通じてキューバのイファを充実させること」である。同組織にはハバナ在住の 35 人のババラオ、2014 年以降に称号を授かった 5 人のイヤニファ（うち 4 人がキューバ人で 1 人がメキシコ人）が加入している（2016 年 3 月現在）。活動に関しては、ビクトル・ベタンコートの組織など、そのほかのエグベとも交流を維持している。

代表のホルヘ・ロジェは、1980 年にハバナで生まれ、1998 年にマノ・デ・オルーラ、2002 年にサント、同年にナイジェリアからキューバを訪れた指導者にイファを授かり、以後、ババラオとして活動している。サンテラであった母の影響、そして、イファ信者が多くいる居住地区の影響によって、同宗教に傾倒していったという。

彼は Yoruba 文化協会のメンバーであり、アフリカの伝統に根差したエグベの諸結社が連盟し、Yoruba 文化協会などと連携し、国際的な活動等を展開していくことに疑問を抱いていないようであった。またビクトル・ベタンコートの業績について深い理解を示しており、エグベが統合される際は、彼こそが代表となるべきであるとの主張から、ビクトル・ベタンコートの影響を

強く受けていることがインタビューで示唆されていた。儀礼に関する変容については、近年、概念や象徴、儀礼内容が変化していることなどが強調された。特筆すべきは、特に近代化の中で、特定の入信者が彼らの職業上の理由によって、剃髪しなかったり、儀礼期間が短縮されたりといった傾向が増えていることに言及しつつも、彼においてはそのような変化自体は受け入れられるものであると主張していた点である。しかし金儲け目当てのパバラオが増加していることに対しては批判的姿勢を強調していた。なお、彼の拠点においても多くの資料が書庫やパソコン内に蓄積されており、これまで紹介したパバラオに共通する特徴が確認できたのである。

次に紹介するのは、2012年にハバナに設立されたエグベ・イファ・セキサ（名称の意は「統一のイファ」）である。代表はホセ・ルイス・ゴンサレス・テジェス（イレテ・メジ）という人物である。

同組織が掲げる目的は「キューバ的イファに関する伝統を完成・充実させること」である。現在、自宅を本拠とした組織に、ハバナ在住 16 人のパバラオ、7 人のイヤニファ（うちキューバ人が 5 人、ブラジル人が 1 人、メキシコ人が 1 人）が加入している（2016 年 3 月現在）とともに、アフリカ在住およびアフリカ出身のパバラオたちとの交流を維持しているとともにキューバ国内のエグベとの連携も行っている。なお活動は、同組織の代表の自宅を拠点としている。

彼へのインタビューの内容は以下の通りである。「パバラオ・トラディショナルリストの連盟を組織することに関しては、同意している。イファ・クリオージョの実践者たちにもっと情報を提供すべきだと考えている。ヨルバ文化協会はイファ信仰の実践者たちを分断しているように思う。我々、イファの聖職者は皆、同じ目的に向かっていてもかかわらずである。オルンミラは分断ではなく統合を教えている。ヨルバ文化協会は、イヤニファに反対しているが、イヤニファはナイジェリアに伝わる 700 年前からの伝統である。したがってヨルバ文化協会の方向性には同意できない。私は同会の会員となっているが、ここ何年も彼らの行事に参加していない。様々な立場のパバラオたちを結集する彼らの行事への参加に関心がもてない。私は自身のエグベによってこの信仰を発展させていきたい。」

このように発言する彼のエグベには、アフリカの伝統が強く意識されており、アフリカから取り寄せた植物の栽培を始め、信仰の本尊であるオリチャス、儀礼に使用するオペレ、オロケなどもナイジェリアに在住する師匠から受け継いだものを使用しているのみならず、インキーネス、パーム油、ヤギのバター、ジンなどもナイジェリアから輸入したものを使用しており、徹底したアフリカの伝統主義が意識されていた。その反面、イヤニファを認めない Yoruba 文化協会を中心としたババラオ・クリオージョの流れには、強い反感が示されていた。

V コンシリオ・クバーノ・デ・フラテルニダデス・デ・イファ

筆者がハバナに滞在中の 2014 年 8 月 28 日、ハバナ市セントロ・ハバナ地区に位置する「カサ・デ・ラ・ポエシア（詩人の家）」という建物において、第 1 回目となるアフリカ回帰主義的傾向を有した 16 団体のエグベを率いるリーダーが結集し、宗教会議が開催された。同会議は、アフリカ回帰主義的ババラオの代表的存在であるビクトル・ベタンコートの呼びかけで実現したもので、エグベの統合を模索する議論が展開された。

本章では、そこでのやり取りを描写し、現在のキューバにおけるアフロ・キューバ系宗教の現状について考察したい。

会議は 14 時過ぎに、自称植物人類学者であり、ババラオでもあるフリオ・イスマエル・マルティネス・ベタンコートの司会で、社会・心理学研究センターの宗教人類学者、イレアーナ・ホッジ博士の同席のもと始まった。

司会の言葉には、黒人によって設立されたキューバにおける Yoruba 系宗教の最初の組織について言及がなされ、それが現在のアフロ・キューバ系宗教の組織的源流であることが示唆され、そこに集う人々のアイデンティティの原点が共有されている点が強調された。

次いでサンティアゴ・デ・クーバのエグベ・イファ・イラン・アテレ・ジョグボンの代表であるエンリケ・オロスコ・ルビオから、現在、Yoruba 宗教においては儀礼等の実践が荒廃の途にあり、その改善が急務であるとの話があった。

次いで、2013 年 12 月に前述のアンヘル・ウィリアムによってナイジェリアからキューバに持ち込まれたイファ太鼓の演奏が披露された。

続いて、司会のフリオ・マルティネスから、現在のキューバ国内におけるアフリカの要素を重視するエグベの活動や広がりについて紹介があった。そこでは、「1959 年のキューバ革命により、多くのキューバ人がアメリカへ移住し、その中のババラオたちが、アメリカにおいて入信儀礼を行おうとした。しかし宗教的資源が不足していたため、当時のキューバにおける Yoruba 宗教最高責任者、ミゲル・ファブレに対し、アメリカーキューバ間で国交が存在していない中、様々な宗教的支援を要求した。しかし同要請は却下され、アメリカ在住のババラオは視点をアフリカに移すこととなった。その後、数人のマイアミ在住のキューバ人信者がナイジェリア南西部にあるオショグボ村を訪れ入信儀礼を受け、その影響がキューバ本土にも波及し、現在のキューバ人における伝統的アフリカ主義的動向のベースとなっている」との説明がなされた。この説明は、キューバの国内の政治動向の影響により、結果的にキューバにおいてアフリカ主義が強まっていくという構図を示しており、非常に興味深い内容であった。

その後、アンヘル・ウィリアムのナイジェリアでアラバの称号やイファ国際会議の会員証を得た体験が紹介された後、フリオ・マルティネスからアフリカ伝統主義的ババラオ宗教会議のもと、16 のエグベが統一されるべきであること、ナイジェリアでアラバの称号を得たアンヘル・ウィリアムがその責任者となること、それによって国際イファ会議の承認が得られること、法的には同会議が Yoruba 文化協会の下部組織となることなどの提案事項が紹介された。

その後、各メンバーの簡単な自己紹介のあと、質疑応答に移ったが、会議は誰がエグベの総責任者になるのか、という点で議論が紛糾した。その際、キューバにおけるアフロ・キューバ系宗教の直面する諸課題が浮き彫りとなった。

以下、いくつかの代表的なコメントを紹介しよう。

(新聞記者)

「多様なエグベを統合し垂直的な組織を形成することに危惧を抱く。アフロ・キューバ系宗教は社会に弾圧された経緯を持つが、硬直した組織が存在しなかったことが生き残れた理由だと考えている。」

(参加者)

「ウィリアムの経験は素晴らしいものだが、皆がナイジェリアに行くことは不可能だ。称号にしてもそれが重要だとは思はない。そのことで正統性を主張するのはおかしい。」

(ウィリアム)

「私はあくまでもキューバ人であり、キューバにおけるアフロ・キューバ系宗教の実践者である。アフリカの要素はそれを補足するものであり、それによって権威を主張しようとはしていない。」

(参加者)

「ヨルバ文化協会に加入することが提示されていたのは気にかかる。協会はイヤニファについて承認していない。またそもそもこの会議の目的は何か。」

(マルティネス)

「提案事項はこの先、内容を精査し、皆で修正を加えていきたい。この会議の目的は、代表を決め、多様なエグベの活動に方向性をもたらすこと。また情報を共有し、教育を促し、より社会的に承認された存在となることだ。」

(参加者)

「この会議の目的は代表を決め、多様なエグベを統一することなのか？我々の各組織にはすでにリーダーがおり、独自の宗教伝統が定着しつつある。統合され、上から命令されるのはごめんだ。」

(マルティネス)

「命令するような組織系統を考えてはいない。あくまでも民主的に運営することを望んでいる。」

(宗教人類学者：ホッジ)

「重要なことは、皆で討議し代表を決定することです。次回までに様々検討していただき、代表を決定しましょう。」

以上のような内容で、会議は3時間半ほどで終了し、最後に参加者全員で記念撮影がおこなわれ、この日は散会となった。

会議が始まる前、筆者は、アフリカの伝統に関し最も功労があるとの評判を有するピクトル・ベタンコートを総責任者として皆が推薦するののかと思っていたが、それぞれのエグベの立場の違いによって、会議は紛糾した。

また、イヤニファを承認しない Yoruba 文化協会との関係性、組織化そのものに対する方向性などについても多様な見解が顕在化していた。統合的な組織化の流れについては、それが従来の家族的伝統を破壊するという点で危惧が表明されていた。

興味深い点はウィリアムの発言の中で、アフリカの要素に依拠したアフリカ系伝統主義者であることを拒否し、あくまで自身の宗教的アイデンティティがキューバに依拠している点が強調されていたことである。またそれに対し反対意見が提示されなかったことである。それは、参加者のいずれもが、アフリカの伝統主義者であると同時にキューバ人としてのアイデンティティを持ち合わせており、便宜上、あるいは教義上、アフリカの要素を自らの信仰実践に取り入れ、他との差異化を図ってはいるものの、ベースはキューバ文化に依拠していることが示唆されているのである。しかしよりキューバ文化に根差した流れである Yoruba 文化協会に対しては、否定的なコメントも確認できた。このあたりは参加者のアイデンティティが揺れ動く側面のようにあり、民衆文化、実践コミュニティの境界における多義的態度として理解することができよう。

VI 結論

最後に本論第I章でふれた仮説を念頭に、実践コミュニティ論に依拠した民衆宗教として論を展開してきた本稿の結論をまとめておきたい。

まず、グローバル化の影響に関してであるが、ヨルバ系宗教の実践が、個人の家やパドリーノの家を拠点に、家族的な紐帯のもと、口頭伝承を中心とした知識の継承が重視されるといった実践コミュニティ的環境の中で発展してきたにもかかわらず、近年は、書物やインターネットなど様々なメディアによる情報の拡散が要因となり、師弟関係、家族的紐帯などが脆弱化しつつあるという点である。

他方、ナショナルな影響に関しては、グローバル化の影響に対抗するように、国家の強いサポートを受ける、キューバ国民文化に根差したヨルバ文化協会の影響が拡大しつつある一方で、同協会に対立的な諸集団がフラテルニダーデス（フラテルニティの複数形）との名称で、アフリカ回帰主義を標榜し、それぞれの活動を展開しつつある。そこでは、ローカル性をベースに、グローバルな言説、特にナイジェリアにおける女性聖職者の権威を承認し、返す刀でナショナルな動向としてのヨルバ文化協会における動向をクリオージョ派として定義づけ、イヤニファを認めない方針に対立的な見解を提示する傾向が顕在化しつつある。また、アフリカの伝統を重視し、ナイジェリアでのイニシエーションの授与やアフリカにおいてのみ実践されてきた儀礼の導入、アフリカ原産の薬草の栽培やその活用、ナイジェリアから輸入したサントや宗教用具などの使用など、グローバリゼーションにおけるアフリカ回帰主義的傾向が顕在化しているのである。

またそうしたグループがコンシリオ・デ・ババラオ・トラディシオナリスタなどの枠組によって、統合を目指す動きがあると同時に、ヨルバ文化協会との関係性については多様な見解がみられ、容易に統合が実現しないことが予想された。

アフリカ回帰主義者の多くは、公的あるいは表面的には、アフリカ・ナイジェリアの伝統を本質主義的観点から受容し、キューバに伝播していない伝

統を再興しようとしているが、そこには自らの実践をより正統化しようとの目論見も垣間見えるのである。実際、彼らへの個人的インタビューでは、彼らもキューバで実践されている Yoruba 系宗教の伝統がアフリカにはすでに残存していないことを承知しており、同時にナイジェリアで入信儀礼や種々の称号を得てキューバで影響を拡大しようとする実践者に対しては否定的見解が共有されていたのである。

こうした傾向は、グローバル化社会における民衆宗教のナショナル、ローカルな諸相と競合し変化するヘゲモニー的折衝過程としても、またそこでのアイデンティティ化のプロセスとしても、非常に重要な特徴を示していよう。

現在のところそのような正統性の揺れ動きは、それぞれの集団の指導者の教義・儀礼の解釈、実践に大きく依拠しており、指導者の方向性が種々の利害関係などによって変化すると共に、正統性の根拠やそれをめぐる諸言説も変化する傾向にある。

アフリカ伝統主義者たちの統合や彼（女）らの Yoruba 文化協会との統合はいましばらく時間を有すると考えられるが、それによって Yoruba 系宗教がさらに変化していくことは論を待たないであろう。今後の動向に注目し、調査を継続していきたい。

付記

本稿は、JSPS 科研費 JP26370964 の助成をうけて実施した研究成果の一部である。

<注>

- (1) 工藤多香子は自身の論文〔工藤 1998 : 512-513〕で、サンテリア信仰の組織は存在しないと論じているが、すでに 1990 年代初頭には組織化が始まっていたことを指摘しておきたい。
- (2) 集団に属するメンバーが周辺の立ち位置から、師匠や集団の構成員の言動を見よう見まねで体得していく過程。実践的スキルの体得に重要な教育プロセスとして指摘されている。詳しくは次の書〔レイヴ／ウェンガー 1993 : 109〕を参照のこと。
- (3) なお同定義に関しては、次の書〔Garcia Canclini 1982 : 63〕の「民衆文化」

に関する定義を参考にしている。ちなみに、民俗文化、ポップカルチャー、ポピュラーカルチャーなど隣接する用語との関係については、拙論〔井上 2008 : 83, 2013 : 36-42〕を参照のこと。

- (4) 本稿での地名は、スペイン語の発音を日本語表記したものであるが、ハバナに関しては、日本で普及しているという点から、英語の発音に基づいている。
- (5) 本稿での儀礼の詳細以外のプロセスや解釈が存在することを断っておく。
- (6) カステランの書〔カステラン 1993〕を参照のこと。
- (7) オロフィ（オロフィンと同義語）は天地の創造者であり、それぞれのオリチャに力を与えたとされる。オロドゥマレはオロフィのもつ形の一つであり、自然界と宇宙の支配者と定義されている。さらにオロルンと呼ばれる太陽と生命を象徴する神が存在し、これらが合わさるとレグラ・デ・オチャにおける三位一体となる。
- (8) レグラ・デ・オチャという名称から理解できる通り、オリチャはオチャと同義である。またアフリカ主義的伝統では、オリシャと呼ぶことも多い。
- (9) ディログンはサンテロ（ラ）が 16 個の子安貝の殻を 2 回ばら撒き、口が上向きになったものの数によって卦を見る儀礼である。卦は 256 通りあり、それにそったパタキンとよばれる神話、寓話をサンテロ（ラ）は提示しなければならない。なおババロチャ、イヤロチャの呼称であるが、これはキューバの伝統に沿った名称であり、アフリカ主義的表現では、ババロリシャ、イヤロリシャと呼ばれることも多い。
- (10) イファ占いも 256 の卦によって構成されているが、ディログンとは異なった内容のメッセージと結びついている。

<参考文献>

- アパデュライ, アルジュン, 2004, 『さまよえる近代 ―グローバル化の文化研究』 門田健一訳、平凡社。
- 井上 大介, 2008, 「メキシコ民衆文化としてのルチャ・リブレ：テクニコ・ルードをめぐる儀礼性・遊戯性」『ソシオロジカ』 32 (1・2): 81-112。
- 井上 大介, 2013, 「グローバル化社会における『民衆宗教』」『ソシオロジカ』 37 (1・2): 35-56。
- 井上 大介, 2015, 「キューバにおけるサンテリニア信仰をめぐる人類学的実践」『ソシオロジカ』 39 (1・2): 27-61。
- 大杉高司, 2003, 「ある不完全性の歴史：20 世紀キューバにおける精神と物質の時間」『文化人類学』 69 (3): 437-459。
- 小田亮, 1996, 「ポストモダン人類学の代価 ―ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」『民族学博物館研究報告』 21 (4): 807-875。
- カステラン, イヴォンヌ, 1993, 『心霊主義 ―霊界のメカニズム』 田中義広訳、白

水社。

ギアツ, クリフォード, 1987, 『文化の解釈学』 吉田慎悟他訳、岩波書店。

ギデنز, アンソニー, 1993, 『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』
松尾精文／小幡正敏訳、而立社。

工藤多香子, 1998, 「『文化』をめぐる戦略と操作の相克 キューバ・サンテリア
の儀礼太鼓パタを中心として」『民族学研究』 62 (4): 494-516。

工藤多香子, 1999, 「90 年代キューバ、アフリカ系カルトの行方 観光商品化され
るサンテリア」『ラテンアメリカ・カリブ研究』 5: 12-27。

クリフォード, ジェイムズ／マークス, フィッシャー編, 1996, 『文化を書く』 春日
直樹訳、紀伊国屋書店。

サッセン, サスキア, 2011, 『領土・権威・諸権利 —グローバリゼーション・スタ
ディーズの現在』 伊豫谷登士翁 (監修)、伊藤茂訳、明石書店。

田辺繁治, 2002, 「序章」田辺繁治／松田素二 (編)『日常実践のエスノグラフィ』
世界思想社。

田辺繁治, 2003, 『生き方の人類学』 講談社。

田辺繁治, 2010, 『生の人類学』 岩波書店。

田辺繁治, 2012, 「情動のコミュニティ —北タイ・エイズ自助グループの事例から」
平井京之介 (編)『実践としてのコミュニティ —移動・国家・運動』 京都大学
出版会: 247-271。

デュルケム, エミール, 1975, 『宗教生活の原初形態』 上巻、古野清人訳、岩波書店。

ド・セルトー, ミシェル, 1987, 『日常実践のポイエティック』 山田登世子訳、
国文社。

レイヴ, ジーン／エティエンヌ・ウエンガー, 1993 『状況に埋め込まれた学習 —
正統的周辺参加』 佐伯胖訳、産業図書。

ロバートソン, ローランド, 1997, 『グローバリゼーション —地球文化の社会理論』
阿部美哉訳、東京大学出版会。

Argyriadis, Kali, 2005, Religión de indígenas, religión de científicos: construcción de
la cubanidad y santería. *Desacatos* 17: 85-106.

Cabrera, Lydia, 2009, *El Monte. Letras Cubanas*.

Fernández, Dámian, 1992, *Revolution and Political Religion in Cuba*. Temple
University Press.

García Canclini, Néstor, 1982, *Culturas Populares en el Capitalismo*. Nueva Imagen.

Gramsci, Antonio, 1975, *Cuadernos de la cárcel*. 6 Valentino Gerratana (ed.), Ana
María Palos (Traducción), Ediciones Era.

Moore, Robin, 1920-1940, *Nationalizing Blackness*. University of Pittsburgh Press.

Ortiz, Fernando, 1921, Los cabildos afro-cubanos. *Revista Bimestre Cubana* 14,
No.1:5-39.

Ortiz, Fernando, 1984, *Ensayos etnográficos*, Ciencias Sociales.

Ortiz, Fernando, 2007, *Los negros brujos*. Ciencias Sociales.

Palmié, Stephan, 2013, *The Cooking of History*. The University of Chicago Press.

Movement and it's Diversity of African Traditionalists of Yoruban Religious Practitioners in Cuba

INOUE Daisuke

Abstract

This article aims to analyze the Regla de Ocha-Ifá as an Afro-Cuban Religion in Cuba, focusing it in 2 groups: ① Organization based on the National Culture and ② African Revivalism movements.

Regla de Ocha-Ifá is a popular religion developed through the slave trade in the Atlantic. It was the religion rooted in the Yoruba Culture that spread the current Nigeria and its neighboring regions, and developed in Cuba, fusing with Catholicism and spiritualism.

In the recent Cuba, however, it is apparent that this religion has become more systematized and thus, their practice has seen modification being made, due to the country's political and social changes.

As the main theme of this article, it is important to note that the historic Afro-Cuban practice has resulted in a conflict between the Cuban traditionalists and the African traditionalists, as they become more systematized because of political, social and cultural transformation Cuba is currently undergoing.

Keyword: Yoruban Religion, Regla de Ocha-Ifá, Cuba, Popular Culture, Globalization, Community of Practice